

## 産地、今(7)

## リレー随筆

## 静岡県のセルリー産地だより

(静岡県農業試験場普及課 あるきたかのり 古木孝典)

The Introduction of Celery-Producing District in Shizuoka. By Takanori FURUKI

(キーワード：産地だより，セルリー，マメハモグリバエ，セルリー萎黄病，静岡県)



セルリー栽培風景

## I 産地の概要

静岡県の野菜園芸は、温暖な気象条件や、東西の二大都市圏の中間に位置するなど地理的条件にも恵まれ、施設野菜や秋冬露地野菜など多種類の野菜を生産している。

これら静岡県の特産野菜の代表に、西部地域で生産されているセルリーがある。主産地は浜松市、湖西市、浜北市、雄踏町などで静岡県全体の95%が生産され、その栽培面積は177 haである。

静岡県のセルリーは冬から春に出荷され、これに続き長野県が夏から秋に出荷を行い、二つの産地により全国生産の63%を担っている。浜松市を中心とした地域では「浜松洋菜協議会」を組織し、セルリーをはじめ10品目の洋菜を共販している。その中でも「共販委員会セルリー部会」は、販売面や生産対策の統一、出荷規格、出荷体制、他産地や出荷先の調査、消費活動の宣伝などの活動を活発に展開している。出荷物はすべて真空予冷を行っており、京浜、中京、京阪神戸市場など全国に出荷されている。

最近では、外国産の低価格品が国内産セルリーの価格にも影響を与えるなど、産地を脅かす要因は増大している。これに対処するために、大規模先進的経営体の育成、省力生産、出荷体制の整備を行う必要があり、西部農業改良普及センターでは、JAや経済連などととも到低コスト生産体制の確立や新たな流通形態への取り組みを実施している。

これまでに、定植の機械化、移植回数の削減、肥効調節型肥料による減肥実証を推進してきた。また、新しい流通形態への取り組みとして、小袋パック出荷やコンテナ出荷の試験を現在も継続実施している。

## II 近年問題化した病害虫

## 1 マメハモグリバエ

マメハモグリバエ (*Liriomyza trifolii* (BURGESS)) は、1990年に本県浜松市において国内で初めて発生が確認された。本種は、発見当初から合成ピレスロイド剤、有機リン剤、カーバメート剤等に抵抗性を示しており、瞬く間に地域全体に拡大した。本種はセルリーにも寄生し、幼虫は葉肉を潜孔して食害するため、葉表に白色の不規則な線状の潜孔痕が現れ、商品価値が低下し、産地に甚大な被害を及ぼした。

発生当初から、静岡県農業試験場は本種の生態の把握と有効薬剤の探索に着手し、同病害虫防除所は発生消長を調査した。現地の普及センター、農協等指導機関は、これら研究成果の情報を生産者に対し迅速に提供するとともに、生産者への防除対策指導を徹底して実施した。

関連農薬メーカーの協力により1997年にフルフェノクスロン乳剤、1999年にエマメクチン安息香酸乳剤がそれぞれ防除剤として登録が拡大された。産地内で広く活用されるに至った。

産地と関係機関が連携したこれらの取り組みによって本種の発生は年々減少し、1998年にはほぼ沈静化した(図-1)。

## 2 セルリー萎黄病

2000年秋、露地栽培と早期ハウス栽培の作型の圃場において、株の導管部が褐変し、外葉から黄化、萎凋した後、枯死にいたる症状が多発した(図-2)。診断の依頼を受けた農業試験場では病原菌の分離、同定と接種試験を行い、*Fusarium oxysporum* によるセルリー萎黄病であることを明らかにした。さらに翌年に